

うとためいきをついた。

愛宕公園前にあるコンビニに、世にもめずらしいホワイ
トピカチューのポスターがはってあるというから、見にい
こう。

そんなベンの言葉を、信じた自分がなさけない。四年生
までは子どもだけでいってはいけない学区外へ、自転車と
ばしてみれば、たしかに真っ白けのピカチューのポスター
があったけれど、あれは去年の映画ポスターが、日にやけ
て色がぬけただけ。あれをホワイトピカチューというのな
ら、となりにってはあった「釣りバカ日誌」の古いポスタ
ーは、ホワイト西田敏行ってことになってしまっじゃない
か。

まあそれだけならば、はははとわらっておしまいだっ
たのに、後がいけない。

“五分のぬけ道”で帰ろうよ。

やつが前にここに来たとき、見つけたというその道をと
おれば、五分ぐらいで家につくというのだ。それがどうだ。
もう三十分近くうろろしているのに、ぜんぜんたどりつ
かない。それどころか、迷子になってしまったのだ。

ふいにベンは、ぺろりと人差し指をなめると、高々と手
をあげた。

「南南東の風、風速一メートル」

「それで」

「えーえー、ちょっとぴり塩味」

「指の味なんか聞いてない」

ベンは、へらへらとわらった。

こいつに期待した自分がバカだった。

「まあまあ、のんびりいきましょう」

「そうはいかないんだよ」

ここ数日、毎日のように市の教育委員会から送られる防
犯情報メールに、うちの母さんはピリピリしていた。きの
うも春日町に包丁を持った不審者が現れたというメールが
来て、そっちには、よるなさわるな近づくなど、うるさく
いわれたばかりだった。それがまさか、春日町のさらに先
にある愛宕町で道に迷っているなんて知られたらどうなる
ことか。

うで時計をみれば、もう四時二十五分。空に太陽がギラ
ギラしていても、五時までには帰ってこいと、いつもいわ
れてるといふのに。

「とにかく、一度コンビニまでもどろうよ。その方がぜっ
たい確実だって」

ぼくは言ったが、ベンはうなずかない。

「なんかこのへん見おぼえあるんだよな。もうちょっと南
にむかっていってみようよ」

そういって、北にのびる道を指さした。だめだこりゃ。

「あーもう勝手にしろ。お前一人でいけよ。その南にむか